

# 奉燈

2018 August

8月号



主宰の句

安立公彦

休耕田続く車窓や梅雨に入る

十葉の列なす白さ旧街道

玉杯に分かつ冷酒や紅緑忌

太宰忌や雲居はるかに朝の虹

梅は実に藤村ここに眠るかな

(大磯・地福寺)



久保田万太郎の句

梨剥いてやりながら子に何いへる

久保田万太郎句集 昭和十二年

息子をいとしいと思いつつも、素直に表現出来ない万太郎の父親像が見えてくる。桃や林檎ではなく、梨と云ったところに寂寥感も感じられる。

私の父も明治生れ、愛情表現が下手であった。子供の頃は唯々恐い父であったが、その心の奥には娘に対しての熱い思いがあったのだと、今にして思われる。

松山三千江

# 久保田万太郎の句

## ふるさとの月のつゆけさ仰ぎけり

『冬三日月』昭和二十五年

「九月二十六日、十五夜、たまく浅草にあり」との  
前書がある。万太郎は浅草田原町に生まれて育ち、のち  
二十五歳で駒形に転居し、以後亡くなる七十三歳まで  
十二回の転居、三回の火災に遭遇している。まさに流寓  
の人生。そうした中で生れ故郷の浅草は心のよりどころ  
だった。掲句は転居九回目の鎌倉在住、六十一歳の時の句。  
浅草に仰ぐ月はいつしか涙で潤んでいたのだろう。

小山 繁子

# 燈下集



○ 都丸美陽子

この道をゆくほか知らず道をしへ

ほととぎす暮るるに間あり露天風呂

大花野馬の目うるみ弱りけり

若き日の母に逢ひたし白木槿

日の力ぬけたる釣瓶落しかな

○ 松山三千江

簡素なる昭和の暮しかたつむり（大磯五句）

木版のマリア薄るる花うばら

万緑や潮風わたる吉田邸

夏館ステッキの音そこ此処に

大磯のワンマン道路梅雨に入る

○ 赤羽陽子

音もなく雨降る街や青葉冷

雨晴れて雲の切れゆく立夏かな

鴉の子青空めがけ飛ぶ素振り

少年のこゑがはりして梅青し

短夜の夢は途中に終はりけり

○ 矢口笑子

夏場所や夕風さそふ跳ね太鼓

魚屋の売り声高し初鰹

海の色宿して青き切子かな

葉桜や石の蛙に無事の文字

師と共に歩むこの道緑さす（祝・早桃五百号）

○ 篠原幸子

夏場所や終の住処もサバイバル  
案内図にたどる街筋薄暑光  
バス間遠日傘のすでに遠ざかる  
はてしなく迷ふこの道夏木立  
安心と淋しさ少し額の花

○ 藤原若菜

夏立つやシロフォンの音のあかるさに  
僧院を洩るる讚美歌麦の秋  
右往左往してぶつからず水馬  
緑蔭やセロ奏者への硬貨選る  
母の日の西空仰ぐ夕べかな

○ 大文字孝一

師に学ぶ生くる信まことや新樹光(早桃句会五百回)  
正餐の卓布真白し聖五月  
献灯の焰ゆるがず鑑真忌  
黒南風や鏝くわに透かしの十字紋(澤田美喜装館)  
碑に遊女の句あり草蚩

○ 和田絢子

牡丹の咲ききり連休終はりたる  
落椿掃かず踏まざると通りけり  
正門も裏門もなくばらの園  
蝶既に高きを忘れ走り梅雨  
濃き淡きありて紫陽花咲き初むる

○ 神田恵琳

月涼し浮棧橋のゆれ止まず  
ひともとのあやめを花器に在五の忌  
母遺愛の夏の半衿水の色  
蚊取線香香り身に沁む八十路かな  
未央柳の幸せ色を雨流す

○ 小山繁子

満開といふ寂しさの白牡丹  
真青なる空を畏れず今年竹  
朴咲くや海を見おろす父祖の墓  
涼しさや産土洗ふ波の音  
降りさうな空を支ふる夏木立

○ 小島 昭夫

平成を偲ぶ最後の立夏かな

足首に日をまとひつつ早苗植う

涼風や妻の看取りし終の居間（藤村居）

マリア様を踏むも信心花いばら

冷し酒好漢酔うて熟睡かな（雀禰・藤丸さん）

○ 渡 辺 若 菜

少年の瞳多感や更衣

風薫る小さき書斎の下地窓

大磯や新樹燃え立つ比翼塚

大空へ梢繁るや青葉風（祝・早桃句会五百回）

母の日や母の歳越え独り住む

○ 西 岡 啓 子

鯉のぼり肩車の子手をのぼす

母の日や母も見てゐる青き空

やませ吹く山に張り付く家二軒

慶子忌の近づく茅花流しかな

またたくまに過ぐる一日や夏の月

○ 中村紀美子

新緑や青年父となりし朝

久に履く下駄の音かるき立夏かな

六段のしらべ牡丹の風にのり

夏落葉ふみつつ訪ふや嶋立庵

伊豆の山むらさき重ね夏がすみ

○ 浅 木 ノ エ

熊蜂の突込んでゆく兜門

銀の間や切れゆく雲の皐月富士

風鈴の藤村の風とらへけり

縁側の花一輪や風涼し

虎御前の面輪をさなし梅雨の蝶

○ 懸 林 喜 代 次

母の日や母の在さば百歳に

さみどりの絵具買ひ足す夏はじめ

退勤の巫女のサンダル夕薄暑

豆ごはん酒は早目に切り上げむ

蘆笛のさう言はれば周航歌

# 余言

安立公彦

五月来る不死身かかげて誠旨翔べ 片桐てい女

去る五月九日、信州松本の藤丸誠旨さんが急逝された。三年前に夫人を亡くされ、今年の三月号には、〈福寿草三種の癌を踏み越えて〉という句がある。五月三日投函の七月号が最終稿となった。七十六歳。松本での勉強会の際は何かと協力して頂いた。

てい女さんは、生者に向かうように、「不死身かかげて誠旨翔べ」と呼びかける。作者の無念さがよく分かる。今はただ御霊安かれと祈るばかりだ。

越えてきし峠見返る梅雨の月 佐藤 信子

「早桃句会」の前書がある。去る五月二十九日、早桃句会五百回の祝宴があった。毎月一回の定例会として四十二年の歳月を数える。作者はその句会の指導と句会報の作成に当たり、集う会員を実作で指導されて来た。

信子さんはまた、自身の俳人としての在り方を、「以心

伝心」の、「こころの疎通」をもつて示していたと言つて良い。門下からは多くの俳人が育つている。峠の先には新しい道が続く。今後の更なる発展を願うばかりだ。

田植機の仕種つぶさに見てをりぬ 山内 四郎

田植と言つても、今は棚田に手植えの人を見るくらいで、一般の田植は大方田植機によるものだろう。そつすると、赤い襷の早乙女の姿を見ることは、ごく僅かとなる。

この句、作者は今その田植機の動きを見ている。「つぶさに」、念を入れて詳細に見ているのだ。人の手を借りなくては田植は出来なかつたのは、昔日の田植だった。代わつてそれを今「田植機」が行っている。「仕種つぶさに」に、作者の探究心が大らかに表現されている。

白銀の米寿の髪を洗はるる 柴崎 富子

夏の日々髪を洗うのは、欠かせない日課である。富子さんは現在施設に入居されていると聞く。「髪洗ふ」は自身の髪をわが手で洗うことだが、「洗はるる」とあるのは、夫君甲武信さんに洗つて貰うということである。

この句、「白銀の米寿の髪」が善い。言葉の表現、それ自体に一つの品格がある、と言ふべきか。この「米寿の髪」

は、実際には白髪であるが、その白髪を越えて、際立つた表現を為している作品である。

三日月の清々しさも五月かな 橘 正義

五月という月は、気候にしても、その気候による植物の成長にしても、一年を通して最も安定した月と言えよう。それを、「三日月の清々しさも」と、「三日月」に仮託してあるのが、五月への感情を更に深めている。

夜半、ふと目覚めて窓外を仰ぐ作者。見ると軒端に細い三日月が懸かっている。秋季のような秀麗さはないが、それに代わるさわやかな清々しさがある。それはまた、この句を見る人にも、同じ思いを与えることだろう。

羅やてのひらに年書いてみせ 中村嵐楓子

この、自分の年を掌に書いて、作者にほらと見せているのは女性、それも、〈羅をゆるやかに着て崩れざる〉と松本たかしに詠まれたような女性である。

作者の何気ない問いに、女性は自らの白い掌を寄せて、指で〇〇歳と書く。その俯き勝ちな襟足の白さが、作者には新鮮に見えるのだった。作者は言うまでもなく、よく知られた舞台演出家。この句を見ていると十七文字が生きて呼吸をしているように見え、つい過剰な鑑賞となった。ま

さに舞台の一景としての鑑賞にも耐える作品だ。

三社祭むかし氏子の母愆ぶ 中野さき江

「三社祭」は、浅草の浅草神社の祭礼。毎年五月十七、十八日頃に行われるとある。下町情緒あふれる例祭だ。作者の母堂の中野青芽さんは、浅草神社の氏子だったのだ。生粋の「江戸っ子」と言えよう。私も青芽さんの句集「草紅葉」上梓祝いの際、後方から拝顔したことがあった。川上梨屋さんも居た。三社祭は、母堂にとっても、作者にとっても大切な祭だったのだ。思いの深い句である。

惜春や頬に指触れ像 齋藤 晴夫

「半跏像」は正しくは半跏思惟像。中宮寺の弥勒菩薩像がよく知られている。まさに「頬に指触れ」の姿である。この頬は、指とともに右頬右手である。「半伽」は、左脚を垂れ、右脚を曲げて左の膝頭にのせ腰掛ける姿。言葉にするともどろこしいが、写真を見るとよく分かる。

その中宮寺は、皇后の宮室を寺とした尼寺。この思惟像もどこか女神の面影を宿す。作者は今、その半跏思惟像の前に立ち、端正な仏像を拝している。言葉にはならない思いが静かに湧いてくる。それを作者は「惜春や」とした。名刹の仏像への思いが端正に籠もっている作品だ。

# 当月集

安立 公彦選



○ 川崎雅子

托卵を終へし安堵や不如帰

濃く淡く杜鵑の庭の花あかり

紫陽花や新種の毬の彩重ね

薫風や大正琴の弦弾む

青葉木菟社の杜の暮れなつむ

○ 茂木なつ

卯の花月夜遙かにとほき亡夫の影

苗代ぐみ介護車見送る子の機嫌

予後の身に力合はずや子かまきり

苗代の話題出てくる夕餉かな

ラベンダー匂ふ夏めく湯槽かな

○ 平沢恵子

牡丹より牡丹へ青き風わたる

すねてゐる老犬の背や夏浅し

尺取虫ののぼらむ糸のあえかなる

口中のミント溶くるや濃紫陽花

涼しさの縁側に壺ひとつあり

○ 持田信子

アカシアの花や見返り峠越ゆ

麦秋や当主の守る長屋門

青秋の風吹き抜くる下地窓

藤村の夫婦の墓碑や実梅落つ

沢音の涼しき俳諧道場かな

○ 横山さくら

ストローの向き定まるやソーダ水

幾重にも思ひ重ぬる今日の薔薇

梅雨空に思ひ思ひの傘の花

夏帽子弾める声の行方かな

背表紙の手擦れの跡や夏の午後

# 春燈の句

安立 公彦選

レーザー治療の五体にひびく春の雷

埼玉 長谷 仁子

春疾風ドミノと化すや駐輪場

手作りの伽羅路好しや朝夕餉

海南風心の濁りもち去れよ

アマリリス純白の花凜として

東京 石原 節子

あぢさゐの色のとりどり川堤

町川の水面かすめて夏つばめ

夕焼に染まる川の面さみしきや

聖五月光琳描く江戸モダン (根津美術館句)

神奈川 山下 健治

新樹光姿やさしき童子仏

大輪の薔薇咲かせたり吉田邸 (天磯句)

西行のゆかりの庵や青葉潮

菖蒲湯のデイサービスに迎へられ

東京 池田 節

五月晴旧知の友と待ち合はず



水掛けの巢鴨地蔵や走り梅雨  
仰ぎ見る泰山木は父の花

手づかみで食ふ幼子や花筵

触れ見たき山笑ふ肌風なぶる

春の波吸ひ尽くしてや海寂と

本堂の真昼の夢や陶磁枕

風薫る稚の瞳に見詰められ

義母のもの似合ふ齡や更衣

銭湯に子供の声や端午の日

眠る子に棟の花の降りかかる

重轡にさても人棲む鯉幟

梅雨晴や鳩の渦舞ふ九輪塔

箱根路や湖の底まで五月晴

短夜の夢を濡らすや通り雨

福島 物江 康平

東京 池上 昌子

東京 大西 武士